

白居易「自誨」詩制作の時空

——元和十年、江州左遷の旅——

諸田龍美

はじめに

元和十年（八二五）、白居易が四十四歳の折に詠じた「自ら誨ふ」詩¹432——以下、適宜「自誨」詩、「詩」と略稱する——は、江州左遷という、人生の重大な轉機に制作された注目すべき作品である。從來、これを本格的に論じた考察はほとんどなかったが、筆者は近時發表した論文においてこの作品を取り上げ、その重要性について述べてきた。

①「琵琶行」の存在論——〈漂泊の慨嘆〉から〈故郷の探求〉へ——、
②「閑適への決意——下邳における心理的基盤の形成——」、③「白樂天の「歸去來兮辭」——「自ら誨ふ」詩と廬山草堂への歸郷——」の三論文がそれである。

本稿は、上記の論文ではなお明確にし難かった「自誨」詩制作の時空を、できるだけ確定しようとする小考にすぎない。しかし、筆者の考えでは、「詩」は、白居易の閑適詩を考察するうえで特に重要な意義を持つ作品なのである。先ずはその重要性について、從來の閑適詩研究及び上記三論文との關係をふまえつつ、述べておきたい。

閑適詩の研究は、下定雅弘氏が概説しておられるように、八十年代

半ば以降、活況を呈し、それに伴って白居易像も大きく轉換した。下定氏の言葉を借りれば、平岡武夫・花房英樹らの「第一世代」が、思想や理念を重視したのに對し、「第二世代」（戦後世代）にとつての白居易は「そのような思想に生きる人ではなく、自己を愛し、自己の欲求を大切にしたい、自分たちの生き方に重なる生き方をした文人」である。³戦後世代の價值観が閑適詩研究活況の背景にあるとする指摘は、本質的で肯綮に中るものであろう。上記三論文における筆者の研究は、白居易の「思想に生きる」側面を再び重視する傾向を帯びつつも、基本的に、戦後の研究動向の延長線上に位置するものである。しかし以下の諸點においては、新たな知見を加え得たと考えてみたい。

一、「琵琶行」は、江州左遷期における漂泊の慨嘆を、落魄の妓女と共有する代表作であるが、その漂泊の慨嘆こそが白居易を故郷の探究へと促し廬山に草堂を築かせた内的な動因、必然性であった。つまり、漂泊の慨嘆と精神的故郷の探究、言い換えれば、感傷詩の「琵琶行」と廬山草堂を詠う閑適詩群は、表裏一體の作品なのである。こうした見方は筆者独自の觀點であり、「自誨」詩には、そうした白居易の精神構造が、典型的に示されている（上記論文①を参照）。

二、閑適詩は、從來、適（快適・快樂）を希求する作品として解釋されてきた。筆者は、適の「かなう」意を重視して、白居易は「自己の本性や情性と、身體や身邊環境とが適うこと」を希求した詩人であったと理解する。さらに、從來指摘されてきた、適（身心の安適）を求める本性とは別に、白居易には直を貫く本性があり、白氏の閑適世界は、それを斷固保守せんとする決意性（直の本性）なくしては實現され得なかつた世界であつた。そうした閑適への決意を強く明示した代表作が「自誨」詩にほかならない（論文②）。

三、白居易の「己れ固有の本性を保守し貫く決意」は、本質的に陶淵明と共通する特質であり、「詩」は、陶淵明が園田への歸郷を宣言した「歸去來兮辭」から、本質的な影響を受けて詠まれている。白居易の廬山草堂への歸郷は、陶淵明の、園田の居への歸郷の本質的再現であり、後年の洛陽閑居は、その結實であつた（論文③）。

要するに、白居易の「自誨」詩は、江州左遷期に顕在化した、閑適詩の定立や、「琵琶行」の詠出、陶淵明の歸郷の再現としての廬山草堂、といった白詩の特質、その根源を指し示す作品として、特に重要であると考えるのである。

よく知られているように、江州左遷は、白居易の詩風や人生の一大轉機であつた。その左遷と、「自誨」詩の制作とは、どのような關係にあつたのか。本稿では、「詩」制作の時空を特定することによって、その關係性の諸相を、具體的かつ本質的に解明してみたいと思う。

一、「自誨」詩の内容と通説

元和九年（八一四）冬、服喪先の下邳から太子左贊善大夫として長安に復歸した白居易は、翌十年に發生した宰相武元衡暗殺事件へのい

ち早い上書を、越權行爲として非難され、また、亡き母への不孝といふ濡れ衣をも着せられて、江州司馬に左遷された。「自誨」詩は、そうした人生の重大な轉機において詠まれた作品である。便宜上、六段に分けて提示する。

①樂天よ樂天よ、來たれ汝に言はん。汝宜しく拳拳として、終身焉を行ふべし（樂天樂天、來與汝言。汝宜拳拳、終身行焉）。

②物に萬縁有りて、人を錮ぐこと鑠の如く、事に萬感有りて、人を熱すること火の如し。萬縁迭ひに來たりて、汝の形骸を鑠ぎ、汝をして未だ老いざるに、形枯れて柴の如くならしめ、萬感遞ひに至りて、汝の心懷を火き、汝をして未だ死せざるに、心化して灰と爲らしむ（物有萬縁、錮人如鑠、事有萬感、熱人如火。萬縁迭來、鑠汝形骸、使汝未老、形枯如柴、萬感遞至、火汝心懷、使汝未死、心化為灰）。

③樂天よ樂天よ、大いに哀しまざる可けんや、汝胡ぞ往に懲りて來を念はざる（樂天樂天、可不大哀。汝胡不懲往而念來）。

④人生百歳、七十稀なり。設使も汝に七十の期を與ふとも、汝は今年已に四十四、却後の二十六年能く幾時ぞ。汝は何ぞ思はざる二十五年來の事、疾速倏忽たること一寐の如きを。往日來日皆暫然たり、胡爲れぞ自ら其の間に苦しむ（人生百歳、七十稀。設使與汝七十期、汝今年已四十四、却後二十六年能幾時。汝何不思二十五年來事、疾速倏忽如一寐。往日來日皆暫然、胡爲自苦於其間）。

⑤樂天よ樂天よ、而今而後、汝其れ飢えて食ひ、渴して飲み、晝にして興き、夜にして寝ねよ。浪りに喜ぶこと無く、妄りに憂ふること無く、病めば則ち臥し、死すれば則ち休め（樂天樂天、而今而後、汝其飢而食、渴而飲、晝而興、夜而寢。無浪喜、無妄憂、病則臥、死則休）。

⑥此中が是れ汝の家なり、此中が是れ汝が郷なり。汝何ぞ此を捨て

て遠く去り、自ら其の^{ことうち}遑遑たるを取らん。遑遑として安^{やす}くにか往
かんと欲する、樂天よ樂天よ歸りなんいざ、(此中^{こちゅう}は汝家、此中^{こちゅう}は汝
郷、汝何捨此而遠去、自取其遑遑。遑遑^{ことうち}兮欲安往哉、樂天樂天歸去來、

内容を、上記三論文との關係にふれつつ、簡潔に確認する。出典や
「歸去來兮辭」との關連など、讀解の詳細は論文③を参照されたい。

第①段では「樂天よ、來たれ汝に言はん」と、この詩が、自らに呼
びかけ、生涯の指針を教え諭す作品であることが示される。第②段で
は、外來の「事」「物」が「汝(『自身』)」を拘束して苦しめ、その結
果、身心の活力が摩耗枯渴してしまつたと、官途における苛烈な精神
的ストレスを表現する。主に武元衡暗殺事件(後述)から江州左遷に
至る間に體驗した、激しい他者との軋轢や葛藤、深い心理的な煩悶や
絶望を象徴的に詠つたものであろう。それをうけて、第③段では、従
來の生き方への懷疑と自戒が示され、第④段では、自己時間の有限性
が深く自覺される。有限性(死)への自覺の深さは、白居易と陶淵明
が共有する特質である(論文②、③を参照)。

第⑤⑥段では、以上の認識が統合されて、「此の(身心の安靜)適
の中」こそが、自己の歸るべき家郷であり、今からそこへ歸るのだと
いう、閑適への決意が表明される。「汝何ぞ此を捨てて遠く去り、自
ら其の遑遑たるを取らん。遑遑として安^{やす}くにか往かんと欲する」は、
「歸去來兮辭」の「曷ぞ心に委ねて去留を任せざる、胡爲ぞ遑遑とし
て何くにか之かんと欲する」をふまえて、これまでの官途における漂
泊を慨嘆した表現である。「琵琶行」の主題とも重なる認識であるが、
この漂泊の慨嘆こそは、精神的故郷、即ち身心安適の探究へと白居易
を促し、やがて廬山に草堂を築かせた、内的な動因にほかならない。
ここには、「琵琶行」と廬山草堂への歸郷を詠う閑適詩とが、表裏一

體の心理から生まれた作品であることが示唆されている。

ところで、第⑤⑥段で呼びかけられている「汝」の本質(呼びかけ
の主體)が、白居易の本性(情性・良心)と判断できることは、論文②
で詳論した。即ち「身心の安靜(適・家郷)」の中に住まう自己の本性
(情性・良心)を、保守する決意性(直を貫く本性)」という構造こそが、
閑適詩の本質なのである。第⑥段にはそれが示唆されている。

さらに、第⑥段末尾の表現「樂天よ樂天よ、歸りなんいざ」は、こ
の「詩」が「歸去來兮辭」を強く意識した作品であることを明示して
いる。実際には、論文③で詳述したように、「詩」の全體が「歸去來
兮辭」の表現や思想から、廣汎かつ本質的な影響を受けており、その
意味で、「自誨」詩は「白樂天の歸去來兮辭」なのである。また三論
文では觸れ得なかつたが、「詩」は、淵明の「辭」と同じく、長短句
の混在した、自由で私的な形式(謠)によって表現されている。それ
はおそらく、白居易が「詩」に盛り込まんとした心情には、淵明の
「辭」の場合と同様、溢れんばかりのものがあ⁴り、定型の器ではそれ
を掬い取るに十分ではなかつたからであろう。長篇自由詩という形式
自體に作品の本質が現れている、と見ておきたい。

では、本稿の課題でもある「詩」の制作時期について、通説を確認
しておこう。従來は大旨「元和十年(八一五)、四十四歳、長安での
作」とされてきた。例えば、朱金城『白居易集箋校』は「作於元和十
年(八一五)、四十四歳、長安」といい、謝思煒『白居易詩集校注』も
これを踏襲する。日本では花房英樹『白氏文集の批判的研究』が、元
和十年、長安での作とするほか、岡村繁『白氏文集 五』も「謠辭か
ら推せば、朱金城の箋校に言うごとく、元和十年(八一五)、白居易四
十四歳、長安在官中の作」とする。主要な年譜では、ひとり臺灣の羅

聯添『白樂天年譜』（國立編譯館、一九八九年）のみが、「此篇憶往念來、情緒消極、大概是本年樂天被貶官以後作」（この作は往時や將來を思い、氣持ちも消極的なので、おそらく左遷後の作であろう）（傍點は諸田）と明記して、通説とは異なつた見解を示す。羅氏のいう「情緒消極」が作品解釋として妥當か否かという問題はさておくにしても、通説を相對化する見解として貴重である。長安での作とする通説と、貶官以後の作とする羅説と、何れが正しいのであろうか。

二、宰相暗殺事件と白居易への處遇

「自誨」詩はその内容の深刻さから、元和十年六月に發生した宰相武元衡暗殺事件よりも後に書かれた作品であることは確實であろう。そこで先ず事件發生當時の状況を概観し、次に事件後白居易が左遷されるまでの経緯を、韓愈の事例とも比較しながら確認しておきたい。

元和十年の當時、三つの藩鎮（淮西節度使の吳元濟、成徳軍節度使の王承宗、平盧軍節度使の李師道）が、あたかも獨立王國のごとく中央政府と對立し、朝命を拒んでいた。こうした状況を打開すべく、元和十年正月、憲宗は本格的な軍事行動に打って出る。その矛先はまず吳元濟に向けられたが、一方で、朝廷内部には、そうした藩鎮を刺激する行動に慎重ないしは反對する勢力も多かった。憲宗はそれら慎重・反對派の主張を退け、斷固討伐軍を派遣したが、そうした憲宗の積極策を、側近として強力に推進したのが、宰相の武元衡と御史中丞の裴度であり、韓愈と白居易も積極策を支持した。討伐の對象とされた吳元濟は、利害を同じくする王承宗や李師道に救援を求め、王李は、表立って吳元濟への恩赦を請う一方、裏では刺客を養い、テロ行爲を畫策した。その結果、六月三日未明、武元衡と裴度が刺客に襲撃され、武元衡は

絶命、裴度もまた深い痛手を負つたのであつた。事件が起こる直前の五月から、白居易が左遷される八月までの状況を、年表形式で確認しておく。

元和十年（八一五）、白居易四十四歳

・五月、憲宗は、吳元濟討伐のため、御史中丞の裴度に命じて諸軍を視察せしむ。考功郎中・知制誥の韓愈が「淮西の事宜を論ずる状」を上奏、憲宗に斷固たる處置を求める。

・六月癸卯（三日）未明、武元衡が刺殺され、裴度も負傷。白居易は即日上書して、犯人檢舉を求める。

・六月乙丑（二五日）、憲宗、裴度を宰相に任ずる。

・六月戊辰（二八日）、王承宗配下の張晏ら五人及びその黨派十四人を、犯人として處刑。

・八月、白居易、江州司馬に左遷される。

この間の経緯を、『新唐書』卷一九「白居易傳」はこう記す。

①是の時、盜武元衡を殺す。京都震擾す。②居易首めに上疏して亟かに賊を捕へ朝廷の耻を刷はんことを請ひ、必ず得るを以つて期と爲す。③宰相其の位を出づることを嫌み、悦ばず。④俄に「居易の母井に墮ちて死す、而るに居易新井篇を賦す。言浮華にして實行無し、用ふべからず」と言ふ者有り。⑤出でて州刺史と爲る。⑥中書舍人王涯上言す。「郡を治むるに宜しからず」と。⑦追つて江州司馬に貶さる。

①是時盜殺武元衡、京都震擾。②居易首上疏、請亟捕賊刷朝廷耻。以必得爲期。③宰相嫌其出位、不悅。④俄有言居易母墮井死、而居易賦新井篇。言浮華無實行、不可用。⑤出爲州刺史。⑥中書舍人王涯上言。不宜治郡。⑦追貶江州司馬。

白居易に對するこうした一連の處遇は、同時期に吳元濟への斷固たる處置を求めて上書した、韓愈に對する處遇と類似する點が多い。『新唐書』卷一七六「韓愈傳」に言う。

①初め憲宗將に蔡（吳元濟）を平らげんとし、御史中丞の裴度に命じ、諸軍に使ひして按視せしむ。還るに及び、具に賊の滅すべきを言ふ。宰相と議して合はず。②（韓）愈も亦た奏して「淮西連年侵掠するも、得るところは費を償はず、其の敗は立ちて待つべし、然れども未だ知るべからざるは、陛下の斷と不斷とに在る耳」と言ふ。③執政喜ばず。④會（韓）愈、江陵に在りし時、裴均の厚くする所と爲り、均の子の鏐、素より無狀（無軌道）なるに、愈文章を爲り、字もて鏐を命ふ」と詆る。⑤謗語囂暴し、是れに由りて太子右庶子に改めらる。

①初憲宗將平蔡、命御史中丞裴度、使諸軍按視。及還、具言賊可滅。與宰相議不合。②愈亦奏言淮西連年侵掠、得不償費、其敗可立而待、然未可知者、在陛下斷與不斷耳。③執政不喜。④會有人詆愈在江陵時爲裴均所厚、均子鏐、素無狀、愈爲文章字命鏐。⑤謗語囂暴、由是改太子右庶子。

①から⑤までの記事を比較してみると、上書した白居易・韓愈兩名に對する朝廷の反應が、實によく似ていることが判明する。まず、藩鎮に起因する重大事案が発生し（①）、韓白は斷固たる處置を求めて上書（②）。しかし爲政者（宰相・執政）はそれを喜ばず（③）、いつしか誹謗中傷が捏造されて（④）、兩者は貶官の憂き目に遭う（⑤）という構圖である。特に④の誹謗中傷は、當然その背後に反對派の策謀があつたはずである。具體的には、白居易の場合には亡き母への不孝が、韓愈の場合には不心得者への不適切な呼稱が、殊更に問題視された。

何れも捏造、言いがかりといつてよい内容であるが、韓愈の記事にあるように、朝廷では誹謗中傷の聲が一氣に高まり、貶官の決定が下された。事情は白居易の場合も同様であつたに違いない。つまり、藩鎮の討伐は、憲宗の強い意向、決斷でもあつただけに、反對派も單にそれを支持する上疏をしたという事だけでは韓白を處罰できず、「倫理問題」が捏造されたのである。これを言い出した者と支持した者とは互いに結託連携して陰謀を企てたのであり、韓白がその罫に落ちたことは明白であろう。

こうした一連の經緯について、白居易は「與師臯（楊虞卿）書」1483において、次のように述べている。

其の與せざる者は、或いは誣して偽言を爲し、或いは構ふるに非語を以てす。……我に同ぜざる者は、得て以て計を爲す。媒孽の辭（讒言）一たび發すれば、又安んぞ君臣の間に、自ら其の心を明白にすべけんや（其不與者、或誣爲偽言、或構以非語。……不同我者、得以爲計。媒孽之辭一發、又安可君臣之間自明白其心乎）。

このような反對派の陰謀（謀語・誣告・偽言・非語）によつて、韓白兩名は「人倫上問題あり」と見なされ降格された。但し、白居易への處分は韓愈に比して一段と厳しく、刺史では手ぬるいとされて、司馬へ落とされたうえで左遷されたのであつた。

三、通説が否定される理由

こうした事情を勘案すると、「自誨」詩は元和十年に長安で制作されたとする通説は成り立ち難いようである。その理由は以下の通り。

一、「詩」には、特に先掲第②段の箇所、長安の官場における身の強いストレスや自己疎外の表現がみられ、それを前提として、

第⑤⑥段において、身心安適への選擇が表明されている。また、そうした自己の家郷（身心の安靜）へと歸る選擇が、きわめて強い決意のもとに宣言されている。従つて「詩」は地方左遷の處分を知つたうえで書かれた可能性が高い。

二、六月三日（暗殺事件當日の上疏）から八月の左遷決定までには、二ヶ月以上の時間があり、その間に亡き母への不孝という「倫理問題」が捏造、議論された。とすれば、左遷の處分と行き先が決定されたのは、そうした紆餘曲折の擧げ句——事態の終盤——なのであつて、處分發表（の直前）まで、白居易や支援者は、その具體的な内容を知り得なかつたと推定される。つまり、先掲『新唐書』白居易傳の「⑤（詔）出でて州刺史と爲る」「⑥中書舍人王涯上言す、『郡を治むるに宜しからず』と」「⑦追つて江州司馬に貶さる」という一連の出來事は、事態終盤の短時日（二、三日の間）に起こつた出來事であつた可能性が高い。

三、「與師臯書」に「僕の左降の詔の下るに及び、明日にして東す。足下（師臯）は城西より來たりて、昭國坊に抵るも、已に及ばず。馬を走らせて澧水に至り、才かに一たび手を執るに及ぶのみ。憫然として訣れ、言は他に及ばざりき（及僕左降詔下、明日而東。足下從城西來、抵昭國坊、已不及矣。走馬至澧水、才及一執手。憫然而訣、言不及他）」とある。近親者（姻戚の楊虞卿）にとつても、江州左遷の決定は、不意に下された慌ただしい命令であつた。従つて白居易が事前に「江州」「司馬」という情報を支援者から得ていた可能性は低い。

四、「東南行一百韻」0908にも「即日雙闕（宮中）を辭し、明朝九衢（長安）に別かる（即日辭雙闕、明朝別九衢）」とあり、「初貶官、

過望秦嶺」0863にも「草草として家を辭して後事を憂ふ。遲遲として國を去り前途を問ふ（草草辭家憂後事、遲遲去國問前途）」とある。つまり白居易は、左遷下命の翌日には草草として長安を離れ、江州に向かわねばならなかつた。その間に「詩」を書く餘裕など無かつたはずである。

五、「詩」の最後「遲遲として安くにか往かんと欲する、樂天よ樂天よ歸りなんいざ」という口吻は、本來住まうべき故郷（身心安靜の場＝江州で實現されるべき境地）へと、これから歸りゆく情況であることを、強く示唆するものである。

以上に列擧した一から五までを總合的に判斷した場合、白居易が長安滞在中に「自誨」詩を書いたとする通説は、ほとんど成立し難いように見える。「詩」（の初稿）は、長安を離れた後、江州に向かう途上において制作されたと判斷するのが適切であろう。筆者としては、「長安での作」とする通説に賛同することはできないのである。

四、江州途上のいつ頃か

八月に長安を離れた白居易は、十月初旬頃に江州に到着した。ではその途次の、いつ頃どの邊りで、「詩」は詠まれたのであろうか。

花房の分類では、江州への途上で白居易が詠じた詩は、總計五一首^⑩。その内譯は、閑適詩一首0274、感傷詩一〇首0489～0498、律詩四〇首（序文0882は除く）0863～0903。これを、七年後の長慶二年（八二二）、やはり長安から杭州へと向かう途中（江州までは同經路）で詠まれた詩、全三九首と比較して見れば、その違いは歴然としている。杭州途上の三九首は、その内譯が、閑適詩二〇首0335～0354、感傷詩〇首、律詩一九首1309～1327となつてゐるのである。つまり、

江州途上詩（元和十年）對杭州途上詩（長慶二年）の比率は、閑適詩では一對二〇、感傷詩では一〇對一〇、律詩では四〇對一九であり、江州途上詩における閑適詩の少なさを、感傷詩の多さが際立っている。これは、同じく「左遷」の處分を下されながらも、それを受けとめる白居易の心境に、大きな差異があったことを鮮やかに物語る數字であろう。江州途上詩五一首の中で、「自誨」詩制作の時空を確定するという本稿の課題から、先ず注目されるのは、唯一の閑適詩「舟行」0274であろう。「江州路上の作」という自注が付されている。

帆影日漸高 帆影 日漸く高く

閑眠猶未起 閑眠 猶ほ未だ起きず

起問鼓柁人 起きて柁を鼓する人に問へば

已行三十里 已に行くこと三十里

船頭有行竈 船頭に行竈有り

炊稻烹紅鯉 稻を炊いで紅鯉を烹る

飽食起婆婆 飽食し起つて婆婆（歩き回る）たり

盥漱秋江水 盥漱す 秋江の水

平生滄洲意 平生 滄洲（江湖隱逸）の意

一旦來遊此 一旦 來たりて此に遊ぶ

何況不失家 何ぞ況んや家を失はず

舟中載妻子 舟中に妻子を載するをや

「舟行」という詩題に明らかのように、この詩は、馬から舟での移動に切り替わった後、襄陽―江州という、旅程（長安―江州）の後半において詠まれた作品である。この詩には、充分な睡眠と、気ままな遊逸の気分とが詠われており、左遷の途上とはいえ、ある種の餘裕が生じてきた後の作品であることを伺わせる。一方、舟に乗り換えた當

初、襄陽で詠まれた律詩「襄陽舟夜」0827には「馬を下る襄陽の郭、舟に移る漢陰の驛。……本よりはれ愁ひ多き人、復た此れ風波の夕べ（下馬襄陽郭、移舟漢陰驛……本是多愁人、復此風波夕）」のように、未だ漂泊左遷の憂愁が強く響く。感傷詩の「舟中夜雨」0277でも「船中に病客有り、左降せられて江州に向かふ（船中有病客、左降向江州）」と詠う。川合康三氏は、閑適詩「舟行」と感傷詩「舟中夜雨」とを比較して、次のように述べておられる。

對照的な二首の詩、どちらが彼の本心であったかを問うことは意味がない。詩にうたわれた感情をそのまま作者自身の胸中に生じた思いであると捉えるのは短絡である。作者は表現の型に沿ってうたうのであつて（中略）「閑適」に収められたこの「舟行」詩は左遷という同じ事態を喜ばしい面から捉え直す。詩の感情表現に「閑適」という新しいかたちを、白樂天は付け加えたのである。教えられることの多い指摘である。但し、ここで筆者が問題にしているのは、そのような「閑適」詩が、江州左遷の途上では一首しか詠まれていないという、數量の問題である。これに先立つ下邳退居期には、すでに多くの「閑適」詩（に分類されることになる作品）が詠まれており、また、後年の杭州左遷の旅程では、二〇首もの閑適詩が詠まれた。部類（表現の型）の差異という観点のみでは、數量の差異を説明することは困難であると思う。江州途上の閑適詩がわずかに一首である理由は、左遷の衝撃があまりにも強烈であつたからであり、にもかかわらず、「舟行」の詩にある種の餘裕が看取されるのは、時間の経過による心理的回復を示すもの、と見るのがよいであろう。事實、旅程後半（襄陽―江州）の律詩には、以下のように、達觀の境地を詠う作品が複数現れてくるからである。

- 「頼に禪門の非想定を學べば、千愁萬念一時に空し」(頼學禪門非想定、千愁萬念一時空) 「晏坐閒吟」0838
- 「國を去り家を辭して異方に謫せらる、中心自ら怪しむ憂傷少なきを」(去國辭家謫異方、中心自怪少憂傷) 「讀莊子」0890
- 「生去死來 都て是れ幻なり、幻人の哀樂 何の情にか繋る」(生去死來都是幻、幻人哀樂繫何情) 「放言五首其五」0897
- 「空門の平等の法を學ぶが爲に、先づ老少死生の心を齊しくす」(爲學空門平等法、先齊老少死生心) 「歲暮道情二首其一」0898
- 「禪功自ら見はれて人の覺る無きも、合に是れ愁ふる時にも亦た愁へず」(禪功自見無人覺、合是愁時亦不愁) 「歲暮道情二首其二」0899

こうした達觀を詠ずる詩が、長安―襄陽という旅程前半の詩群にはまったく見られない、という事實を合わせ考えた場合、閑適への決意を表明した「自誨」詩は、やはり旅程の後半、襄陽―江州間の船旅において詠まれた作品であつたと、推定しておくべきであろう。

五、「莊子を讀む」との共鳴

そのような目で見た際に注目される詩が「讀莊子」0890である。

去國辭家謫異方 國を去り家を辭して 異方に謫せらる
中心自怪少憂傷 中心自ら怪しむ 憂傷少なきを
爲尋莊子知歸處 莊子を尋ねて 歸處を知り

認得無何是本郷 無何は是れ本郷なるを認め得たるが爲なり

七言絶句の短篇ではあるが、この詩の内容が、先掲した「自誨」詩の後半と響き合うものであることは明らかであろう。「無何」とは、『莊子』の逍遙遊篇、應帝王篇、列御寇篇に見える「無何有之郷(何

物もない土地)」。ここでは、底本の語釋が言うように「何物にも拘束されない自由の境地」を指す。白居易は、前年の元和九年に下邦で詠じた「渭村退居……詩一百韻」0807でも、末尾において「不動を吾が志と爲し、無何は是れ我が郷なり。憐れむべし身と世と、此れより兩つながら相忘れん(不動爲吾志、無何是我郷。可憐身與世、從此兩相忘)」と詠じていた。旅程の後半(襄陽―江州)に至つて、漸く同じ「餘裕」を取り戻し得たと考えるべきであろう。

さらにこの境地は、「詩」の後半で「身心安靜の境地こそ、わが家郷である(此中是汝家、此中是汝郷)」と述べていた認識と通底する。即ち、現實のどこかの土地ではなく、身心安靜の境地こそ家郷だ、とする「自誨」詩の發想は、何物にも拘束されない自由の境地に逍遙する、『莊子』の「無何有之郷」の思想を、その淵源に持つと考へ得るのである。だとすれば、白居易は實際にも、文字通り、『莊子』を尋ねて(讀んで)歸處を知つた」と見ることもできるわけである。江州へと向かう白居易が、今後は長安ではなく、身心安靜の境地こそが汝(自分)の家郷であり、「今からそこへ歸るのだ(樂天樂天歸去來)」と、「詩」において詠い得た理由も、故郷の精神化という『莊子』的な發想の轉換にあつた。超俗的な自由安靜の境地(無何有之郷)に歸ろうとする決意は、「詩」の本質であり、それは世俗的價値觀の象徴でもある長安を、離れてゆくという情況下で詠せられてこそ、むしろ一層説得力を増すであろう。

要するに、「讀莊子」詩と「自誨」詩とは、その本質において深く共鳴しているのである。「讀莊子」詩に即して解釋すれば、「詩」が詠じているのは、「今後は、世俗の名利や儒家的處世の頂點に君臨する首都長安から身心ともに離脱し、江州では、『莊子』に言う超俗的な

自由安靜の境地（無何有之郷）を自らの家郷と見定めて、その境地に逍遙しようという決意」なのであった。

そればかりではない。「詩」と『莊子』との関連性をさらに指摘すれば、前掲第⑤段「樂天よ樂天よ、而今而後、汝……浪りに喜ぶこと無く、妄りに憂ふること無く、病めば則ち臥し、死すれば、則ち休め」は、大宗師篇の「且つ夫れ得る者は時なり、失ふ者は順なり。時に安んじて順に處れば、哀樂も入ること能はず（且夫得者時也、失者順也。安時而處順、哀樂不能入也）」、「夫れ大塊（天地自然）は、……我を息はしむるに死を以てす（夫大塊……息我以死）」をふまえている。即ち、「自誨」詩は、閑適への決意を語るその核心部において、『莊子』の思想と深い関連性を示している。白居易は實際に「莊子を讀」んで「詩」を書いた、と見ても、何ら不都合は生じないのである。

さらに、「讀莊子」詩0890と相前後して詠まれた詩にも、「自誨」詩と類似の表現が認められる。「晏坐閑吟」0888の「意氣消磨す羣動の内、形骸變化す百年の中（意氣消磨羣動内、形骸變化百年中）」は、「詩」の第②段「萬縁迭ひに來たりて、汝の形骸を鑿ぎ／汝をして未だ老いざるに、形枯れて柴の如くならしめ／萬感遞ひに至りて、汝の心懷を火ぎ／汝をして未だ死せざるに、心化して灰と爲らしむ」と呼應する表現であろう。また、「放言五首其五」0897の「何ぞ須ひん世を戀ひて常に死を憂ふを、亦た身を嫌ひて漫りに生を厭ふ莫れ（何須戀世常憂死、亦莫嫌身漫厭生）」は、「詩」の第⑤段「樂天よ樂天よ、而今而後……浪りに喜ぶこと無く、妄りに憂ふること無く／病めば則ち臥し、死すれば則ち休め」と同類の表現である。こうした表現上の類似は、「詩」とこれらの作とが、ほぼ同時期に制作されたことを示唆する傍證と、見ることもできるのである。

以上の考察から、「讀莊子」詩や相前後して作られた詩に、「自誨」詩と同質の認識や表現が集中的に認められることは、明らかであると思う。よって、筆者としては、「詩」が制作された時空は「讀莊子」詩が詠まれた時空とほぼ重なっていたと、推定しておきたいのである。

六、江州到着を目前にして

では、その「讀莊子」詩が作られたのは、旅程後半（襄陽—江州）のいつ頃、どの辺りであったのか。それを絞り込むための前提として先ず確認されるべきは、江州途上の詩五一首が、同じ分類内では原則として時系列順に並べられているという事実である。感傷詩一〇首では、0489から0492までが旅程の前半（長安—襄陽）、0493から0498までが旅程後半（襄陽—江州）の作。時間的には、0489から0498までが秋の作品である。一方、律詩四〇首では、0863から0871までが旅程前半、0872から0903までが旅程後半の作。時間的には、0863から0885（或いは0886）までが秋の作、0886（或いは0887）から0903までが冬の作品。先に見た閑適詩一首（0274）は、旅程後半、秋の作品である。

こうした時系列順の排列を前提とした場合、問題の絶句「讀莊子」詩0890は、空間的には、0872詩より後ろであるから、旅程後半の作。時間的には、0886詩より後ろであるから、孟冬十月の作であることが判明する。さらに、途上感傷詩の最後に配置されている「夜聞歌者」詩0498は「夜に泊す鸚鵡州、江は秋にして月は澄澈す。隣船に歌ふ者有り、發調愁絶するに堪へたり（夜泊鸚鵡州、江秋月澄澈。隣船有歌者、發調堪愁絶）」と冒頭に詠うことから、秋の作品であるが、その自注には「鄂州に宿る」とある。鄂州は、今の湖北省武漢市武昌

區。漢水長江の合流點に位置する。詩中で白居易が宿泊したという「鸚鵡州」は、武漢市にある長江の中洲。崔顥「黃鶴樓」詩の「晴川歷歷たり漢陽の樹、芳草萋萋たり鸚鵡州」の句でも知られる。白居易は、元和十年の晩秋九月に黃鶴樓を附近に眺める鸚鵡州に宿泊し、招かれて登樓したが、以後は漢水を離れて長江を下り江州へ向かった。既述したように、筆者は「自誨」詩を、「讀莊子」詩と同期の作と推定する。従つて、孟冬十月作の「讀莊子」詩と同じく、「自誨」詩は、白居易が晩秋に鄂州（黃鶴樓）を離れた後、初冬十月の某日、長江を下る船旅において詠まれた作品であつたと、推定されるわけである。黃鶴樓出發以後の時空をさらに絞り込んでみたい。時系列順という原則に照らした場合、「盧侍御與崔評事、爲予於黃鶴樓致宴。……」詩0882以後に排列された途上の律詩十八首（連作は一首とする）は、すべて鄂州（武漢市）—江州（九江市）という旅程終盤（長江を下る船旅）の作品である。文集の排列に従つて列挙してみよう。

- ① 0882（秋）「盧侍御與崔評事、爲予於黃鶴樓致宴。宴罷同望」
 ② 0883（秋）「舟中、讀元九詩」③ 0884（秋）「舟行阻風、寄李十一舍人」④ 0885（秋）「雨中、題衰柳」⑤ 0886（冬？）
 「題王處士郊居」⑥ 0887（冬）「歲晚旅望」⑦ 0888（冬）「晏坐閑吟」⑧ 0889（冬）「題李山人」⑨ 0890（冬）「讀莊子」
 ⑩ 0891（冬）「江樓偶宴、贈同座」⑪ 0892～0897（冬）「放言五首并序」⑫ 0898・0899（冬）「歲暮道情二首」⑬ 0900（冬）
 「讀李杜詩集、因題卷後」⑭ 0901（秋？）「強酒」⑮ 0902（冬）
 「獨樹浦雨夜、寄李六郎中」⑯ 0903（冬）「聽崔七妓人箏」
 ⑰ 0904（冬）「望江州」⑱ 0905（冬）「初到江州」
 この十八首について先ず確認しておきたい點は、⑤「題王處士郊

居」を境として、季節が秋から冬へ變化していることである。⑤詩には「寒松は縦ひ老ゆるも風標在り（寒松縦老風標在）」の句がある。これは『論語』の「歲寒くして、然る後に松柏の彫むに後るるを知るなり」（子罕篇）による表現であるが、王處人の高潔な人格を表すのみならず、實景をも反映しているとすれば、冬の詩である可能性がある。④「雨中、題衰柳」には、「知らず秋雨の意（不知秋雨意）」の句があり、秋の詩と確定できる。要するに、⑥「歲晚旅望」以後は、ほぼ確實に冬の詩である。但し⑭「強酒」には、「然らずんば秋月春風の夜、間に往時を思ふを争那何せん（不然秋月春風夜、争那間思往時何）」の句があり、「秋月」を實景ととれば、秋の詩が混入していることになろう。しかし、これ以外に季節の混亂を疑わせる表現はなく、⑥0887詩以後は冬の詩という原則は守られていると見てよい。

次に注目されるのは、⑦0888「晏坐閑吟」詩以降に見られる、情調の急激な變化である。①から⑥の詩では、以下のように、旅愁や悲傷が基本的な情調となつてゐる。

- ① 「酔ひ來りては賞するに堪へ醒めては愁ふに堪へたり」（酔來堪賞醒堪愁）
 ② 「眼痛み燈を滅して猶ほ閑坐すれば、逆風浪を吹いて船を打つ聲」（眼痛滅燈猶閑坐、逆風吹浪打船聲）
 ③ 「且つ愁ふ江郡何れの時にか到らん、敢て望まん京都幾歲にか還るを」（且愁江郡何れの時にか到らん、敢て望まん京都幾歲にか還るを）（且愁江郡何時到、敢望京都幾歲還）
 ④ 「濕に屈して青條折れ、寒に飄りて黄葉多し」（濕屈青條折、寒飄黄葉多）
 ⑥ 「晩に向ひ蒼蒼として南北を望めば、窮陰旅思兩つながら邊無し」（向晚蒼蒼南北望、窮陰旅思兩無邊）

こうした旅愁悲傷の情調は、これ以前の旅程（長安―鄂州）で詠まれた感傷詩や律詩の情調を引き継ぐものである。

ところが、第四章で確認したように、それに続く⑦「晏坐閑吟」、⑨「讀莊子」、⑩「放言五首并序」、⑫「歲暮道情二首」の各詩には、一轉して、達觀の境地といつてよい表現が頻見されるのである。さらに、これに続く律詩⑬「讀李杜詩集、因題卷後」においても、李白や杜甫の窮境を、「天意」が「好詩を要」めた結果だと解釋している。この解釋も、窮境の克服に繋がるといふ意味では、達觀の詩群に通底する要素を持つであろう。しかし、その後の⑭「強酒」、⑮「獨樹浦雨夜、寄李六郎中」、⑯「聽崔七妓人箏」、⑰「望江州」、⑱「初到江州」の各詩には、悟りの境地は詠われていない。

こうした、悲傷から達觀への情調の急激な變化は、既に述べたように、閑適への決意を詠う「自誨」詩が、達觀の境地を集中的に詠う詩群（⑦⑨⑩⑫）と、ほぼ同時期に詠まれた作品であったことを、強く示唆する現象であろう。その心境の急激な變化は、黃鶴樓出發以後の旅程において生じた變化であった。それは、旅程終盤（鄂州―江州）のいつ頃、どの邊りであつたらうか。

七、「自誨」詩制作の時空

推定の手掛かりは先ず、⑩「放言五首」の序文にある。そこには「予出でて潯陽に佐たり。未だ任せらるる所に届かず。舟中暇多く、江上に獨吟す（予出佐潯陽。未届所任。舟中多暇、江上獨吟）」と云う。この序文の書きぶりには、例えば③「舟行阻風、寄李十一舍人」詩で「且つ愁ふ江郡何れの時にか到らん」と歎かれていたような、目的地までの隔絶感は現れていない。しかし、目指す江州城へは、まだ一定

の距離が残されていることを感じさせる表現である。

次の手掛かりは、⑮「獨樹浦雨夜、寄李六郎中」詩である。「獨樹浦」が長江沿岸の那邊かについては、『太平廣記』卷四九一「謝小娥傳」の次の記事が参考になる。父と夫を慘殺された謝小娥が、苦勞の末に復讐を果たす話である。

爾後小娥は便ち男子の服を爲し、江湖の間に備保し、歲餘にして潯陽郡に至る。……（小娥の父と夫を殺害した蘭と春（申蘭と申春）とは、宗昆弟なり。時に（申）春の一家は大江の北・獨樹浦に住み、蘭と往來密治なり。……初め、蘭・春に黨數十有り、（小娥は）其の名を暗記し、悉く擒にし戮に就く。時に潯陽太守張公、娥の節行を善みし、爲に其の事を具して旌表を上り、乃ち死を免かるるを得たり。時に元和十二年夏歲なり。

爾後小娥便爲男子服、備保於江湖間、歲餘、至潯陽郡。……蘭與春、宗昆弟也。時春一家住大江北獨樹浦、與蘭往來密治。……初、蘭・春有黨數十、暗記其名、悉擒就戮。時潯陽太守張公、善娥節行、爲具其事上旌表、乃得免死。時元和十二年夏歲也。

この逸話は實録と目されたようであり、『新唐書』卷二〇五「列女傳」にも「小娥は仇の所在を」物色すること歲餘、蘭を江州に、春を獨樹浦に得たり（物色歲餘、得蘭于江州、春于獨樹浦）とある。即ち「謝小娥傳」によれば、獨樹浦なる街は江州（潯陽）の西郊、長江北岸の地にあり、潯陽の太守張公が事件に對應していることから、江州刺史の管轄下にあつた街であることが判明する。その獨樹浦に、白居易も宿泊した。また、「詩」と同時期に詠まれたと思しい⑦⑨⑩⑫の詩群は、すべて⑮「獨樹浦雨夜……」詩の直前に排列されているのである。

要するに、内容の類似や作品の配列等から総合的に判断した場合、「自誨」詩は、元和十年孟冬十月初旬、白居易を乗せた船が、獨樹浦に到着する少し前、間もなく江州管区内に入らんとする、旅程最終盤の時空において詠まれた、その可能性が最も高いと、筆者は判断するものである。ここに、一説として提案しておきたいと思う。¹⁶⁾

八、文學的意義について

以下では視点を變えて、これまでの考察から新たに見えてきた、「詩」の解釋における新たな視點、江州左遷期の他の代表作との關連性、の二點について簡潔に指摘し、白居易研究史における本稿の意義を確認しておきたい。

第一に、作品解釋上の意義について述べる。冒頭の論文③で指摘したように、「自誨」詩は、「歸去來兮辭」や他の陶詩、及び『論語』『中庸』『易經』『莊子』等の表現や思想をふまえて制作されている。しかし、「詩」と同期に制作された詩群には、以下に見るように、佛教的な悟りの境地が數多く詠われていた。⑦「頼ひに禪門の非想定を學べば、千愁萬念一時に空し」、⑩其五「生去死來都て是れ幻なり、幻人の哀樂何の情にか繋る」、⑫其一「空門の平等を學ぶが爲に、先づ老少死生の心を齊しくす」、⑫其二「禪功自ら見はれて人の覺る無きも、合に是れ愁ふる時にも亦た愁へず」。

こうした佛教思想による悲愁の超克、死生の齊同視は、「詩」の後半、第⑤段に見える「汝其れ飢えて食ひ、渴して飲み、晝にして興き、夜にして寝ねよ。浪りに喜ぶこと無く、妄りに憂ふること無く、病めば則ち臥し、死すれば則ち休め」という思想や決意と通底するものである。つまり、「自誨」詩に表明された人生觀や閑適への決意の

背後には、それらと密接に關連する思想として、佛教哲學（禪の思想）が控えていると見えるのである。これは儒佛道を、三位一體の、本質を等しくする思想として捉える、白居易の特質の顯現でもあろう。こうした佛教思想との表裏一體性は、「詩」の讀解だけでは見通し難い、白居易の思想における本質的構造である。それが、「詩」制作の時空を推定し得たことにより、新たに見えてきたわけである。

第二に、江州左遷期の他の代表作との關連性について述べるが、紙幅の都合で範圍は限定せざるを得ない。

先ず、上述した佛教的悟りを詠じた詩群は、翌年以降白居易を、廬山の僧侶らとの交流へと促した、心理的要因を示唆するものである。

江州左遷の漂泊感や悲哀は、佛教思想や禪僧との交流によつて癒され、超克される場合が多かつたが、左遷途上の作品群に、早くもその先蹤を認め得るのである。¹⁷⁾

次に、元和十一年（八一六）秋の作とされる「琵琶行」との關連性である。都落ちした白居易と妓女とが、夜、船で出會ひ、演奏に感動した白居易が「同じく是れ天涯淪落の人、相逢ふ何ぞ必ずしも曾て相識らん」と感慨を述べる、虚構性を疑われることの多い作品であるが、江州途上の詩には、「琵琶行」を連想させる詩が複数存在する。律詩では、舊知の女性との邂逅を詠う「逢舊」詩0876の設定が、「琵琶行」に似る。この詩には、「傍人（妻）」に怪しまれるほど「惆悵（悲嘆）」を催したとある。つまり、舊知の女性とは、昔戀愛關係にあつた妓女であろうかと想像される點も、妓女を主人公とする「琵琶行」に近似する。また「浦中夜泊」詩0881の「深浦の舟を停めし處を回看すれば、蘆荻花中一點の燈（回看深浦停舟處、蘆荻花中一點燈）」も、「琵琶行」冒頭の「潯陽江頭夜客を送る、楓葉荻花秋索索」を髣

髻させる。さらに「江樓偶宴、贈同座」詩0891には、「相逢且且つ同じく樂しむ、何ぞ必ずしも舊相知ならん（相逢且同樂、何必舊相知）」という類似表現があり、「聽崔七妓人箏」詩0903では、妓女の演奏を聽いての慨嘆を、「白盡す江州司馬の頭（白盡江州司馬頭）」と述べる。「琵琶行」の最終句「江州司馬 青衫濕ふ」を想起させる表現である。一方、感傷詩では、「夜聞歌者」詩0498に「夜に泊す鸚鵡州、江は秋にして月は澄澈す。隣船に歌ふ者有り、發調愁絶するに堪へたり（夜泊鸚鵡州、江秋月澄澈。隣船有歌者、發調堪愁絶）」とあり、類似作として名高い。要するに、こうした左遷途上の詩において獲得された、體驗や着想、表現が、やがて集約されて、大作「琵琶行」へと結實していった、そのように、筆者は考えたいのである。

さらに、元和十二年の「香爐峰下、新卜新居、草堂初成、偶題東壁」其三0878の尾聯には、「心泰く身寧きは是れ歸する處、故郷何ぞ獨り長安に在るのみならんや（心泰身寧是歸處、故郷何獨在長安）」と詠われていた。この尾聯に示された故郷觀、即ち、眞の故郷とは「心泰く身寧き處」であり長安ばかりが故郷ではないという認識は、白居易に特異な、独自の故郷觀であった。²⁰しかし今や、故郷の概念を特定の土地（例えば長安）から切り離し、心身の安靜（心泰身寧）こそが眞の故郷であると詠うこの詩の發想が、左遷途上で詠まれた「自誨」詩や「讀莊子」詩の發想を繼承するものであったことは明らかであろう。「詩」では、末尾に「此中（身心安靜の中）が是れ汝の家なり、此中が是れ汝が郷なり。……樂天よ樂天よ、歸りなんいざ」と詠じ、「讀莊子」詩では、「中心自ら怪しむ憂傷少なきを。莊子を尋ねて歸處を知り、無何は是れ本郷なるを認め得たるが爲なり」と詠じていた。兩詩に詠まれた故郷觀が、翌元和十一年の律詩「四十五」0952では、さ

らに「老來猶ほ命に委ね、安處、即ち郷と爲す。或いは擬す廬山の下、來春草堂を結ばん（老來猶委命、安處即爲郷。或擬廬山下、來春結草堂）」という願望へと進展し、その「安處即郷」の理念が、元和十二年には、草堂という具體物と成つて出現した。その喜びが、「心泰く身寧きは是れ歸する處、故郷何ぞ獨り長安に在るのみならんや」の二句となつて詠出されたのである。即ち、白居易独自の故郷觀は、左遷途上の作品群と併讀されることによって、初めてその形成過程を具體的に理解できるのである。

以上に取り上げた①佛教、②琵琶行、③故郷觀といった論點、また、「自誨」詩に詠出された④閑適への決意、⑤「歸去來分辭」の再現（陶淵明への敬慕）といった論點は、何れも江州左遷期の白居易文學を理解するうえで決定的に重要な事項である。左遷途上の作品群には、それら重要事項の種子や萌芽と見なし得る認識や表現が、既に顯著に現れていた。江州左遷の旅の時空において、白居易は實に豊かな文學的收穫を準備し得ていたのである。

結語

かの暗殺事件への上書以降、長安の官界において彼を見舞つた否定や拒絶、非難や放逐は、白居易の精神を非常な窮境に追い遣つた。しかし白居易の文學にとつて、それは最高の贈與となつたと、言うべきであろう。白居易は途上の詩⑬「讀李杜詩集、因題卷後」において、「天意君（李白・杜甫）須らく會すべし、人間好詩を要む（天意君須會人間要好詩）」と詠じたが、それは同時に、白居易自身にも該當する事實となつたのである。

「自誨」詩は、元和十年（八一五）冬十月初旬、長江を下る白居易

の船が間もなく江州へ到着しようとする時空において詠まれた作品であつた。長安から江州への左遷行は、白居易にとつて、内面の深刻な危機と闘う苦難の旅路となつたが、しかしその旅は同時に、そうした苦闘を通じて、彼の文學に多くの貴重な種子や萌芽を、贈與してくれた。それらは江州到着以後、重要な作品群となつて結實し、白居易の人生や文學に、豊穰な稔りを、もたらしたのである。

注

- (1) 白居易の詩文の引用は、岡村繁『白氏文集』（新釋漢文大系、明治書院）の各本に據り、適宜朱金城『白居易集箋校』（上海古籍出版社、一九八八年）、謝思焯『白居易詩集校注』（中華書局、二〇〇六年）を参照した。四桁の數字は花房英樹『白氏文集の批判的研究』（彙文堂書店、一九六〇年）による作品番號。
- (2) 何れも『白居易研究年報』（勉誠出版）所收。①は十三號、二〇一二年。②は十四號、二〇一三年。③は十五號、二〇一五年。
- (3) 下定雅弘「戦後日本における白居易の研究」、『白居易研究講座第七卷』、勉誠社、一九九八年）一九頁を参照。
- (4) 作品の形式と内容との関連性については、前掲③論文發表後に竹村則行氏からご助言を頂いた。なお、「辭」には苦惱と共に歸郷の喜びが表現されているが、「詩」には喜びの表現がない。それは、陶淵明の歸郷が實際の故郷への主體的歸郷であつたのに對して、白居易の場合は、故郷ではない場所への、左遷の結果餘儀なくされた歸郷であつた、という相違による。しかし、歸郷の本質を自己の本性の完遂と身心の安適に求める點で、兩者は根源的に一致している。
- (5) 平岡武夫『中國詩文選17白居易』（筑摩書房、一九七七年）、太田次男『中國の詩人⑩白樂天』（集英社、一九八三年）のほか、前掲の各種年表を参照した。
- (6) 例えば『資治通鑑』元和十年三月の條に「是に於いて人情恹恹。羣臣多請罷兵、上不許」とあり、同年五月、李師道が養つていた刺客の言葉に「武」元衡死すれば、則ち他相は敢へて其の謀を主せず、争ひて天子に兵を罷めんことを勧めん（元衡死、則ち他相不敢主其謀、争勸天子罷兵矣）」とある。
- (7) 「與師臯書」1483に「武相の氣平明に絶え、僕の書奏、日午（當日の晝）に入る。兩日（二日）の内、滿城之れを知る（武相氣平明絶、僕之書奏、日午入。兩日之内、滿城知之）」と。
- (8) 「與師臯書」で白居易は、自身の江州左遷が、上疏ではなく（亡き母への）不孝を理由に決定されたことに「且つ此れ（上疏）を以て辜を獲るも、顧だ何如せん。況んや又此れ（上疏）を以て罪名と爲さざるをや（且以此獲辜、顧何如耳。況又不以此爲罪名乎）」と、強い憤りを表明している。
- (9) 「追遣として安くにか往かんと欲する」という表現は、「歸去來兮辭」の引用であると同時に、長安を慌ただしく離れて行く、實際の情況をも髣髴とさせる表現であるかもしれない。しかし、そうした解釋を探る場合でも、重要な點は、長安を離れ別の場所——江州へ向かう情況を歸郷と表現していることに変わりはないという事實である。白居易は、陶淵明の歸郷を強く意識しながら、江州へ向かう自身の情況を敢えて「歸郷」と表現した。つまり、「詩」における故郷とは、長安など特定の場所を指すのではなく、江州の生活で實現されるべき境地（身心の安靜）を、指しているのである。
- (10) 「望江州」0904、「初到江州」0905も、途上の作と見なし得るもので

あり、これらを含めれば五三首。

(11) 杭州への轉出にも「左遷」の要素が色濃いことは、芳村弘道「知詰話・

中書舍人から杭州刺史への轉出」(『唐代の詩人と文獻研究』、朋友書店、

二〇〇七年。初出は『學林』二二、一九九四年)を参照。

(12) 川合康三『白樂天』(岩波書店、二〇一〇年)一二五頁を参照。

(13) この点については、拙稿「白樂天のアタラクシア―自己に由るもの」と(由らぬもの)との峻別―(『新しい漢字漢文教室』五六號、二〇一三年)で詳述した。

(14) 『元和郡縣圖志』卷二八「江州」によれば、唐代における鄂州―江州

間の主要交通路の距離は、五九三里、約三三二km。長安―江州間の距離

は、二七六〇里、一五四五km。ちなみに、天寶九年(七五〇)に潯陽の

龍泉寺を訪れた鑑真和尚(大和上)は、九江驛から潤州江寧縣(南京

市)まで、長江を七日間で下っている。藏中進編『寶曆十二年原本唐

大和上東征傳』(和泉書院影印叢刊二第一期、一九七九年)に「(江州

の)太守親しく潯陽縣より九江驛に至る。大和尚、舟に乗り、太守と別

れ去る。此れより七日、潤州江寧縣に至り、……(太守親從潯陽縣至九

江驛。大和尚乘舟、與太守別去。從此七日、至潤州江寧縣、……)」と

ある。鄂州―江州間は、江州―潤州間よりも短距離(三分の二程度か)

なので、通常であれば四、五日程度で下れたはずである。しかし白居易

の左遷行は急ぎの旅ではなく、実際にはさらに多くの日数を費やしたで

あろう。重罪犯の場合は日に十驛(三百里)と規定されていたが(『唐

會要』卷四一)、白居易の場合は、長安を離れた直後でも日に一驛(三

十里)しか進んでおらず(「初出藍田路作」0490)、先を急ぐ旅ではなかつた。李德輝『唐代交通與文學』(湖南人民出版社、二〇〇三年)第四章を参照。

(15) 謝思焯『白居易詩集校注』の當該詩「獨樹浦」補注にも「其の地は潯

陽に近くして江北に在り(其地近潯陽而在江北)」とある。

(16) 現代の地名では、江西省九江市に近い、湖北省黃石市東郊もしくは武

穴市南郊の長江沿岸もしくは船上において、となる。

(17) 例えば、花房英樹『白樂天』(清水書院、一九九〇年)「(四)思想の

位相」を参照。

(18) 例えば、廬山草堂について、元和十二年の「祭匡山文」[109]では「遺

愛寺の側、既に草堂を置き、其の中に居て、參禪養素せんと欲す(遺愛

寺側、既置草堂、欲居其中、參禪養素)」といい、同年の「祭廬山文」

[108]では「唯に水石を耽玩し、以て野性を樂しむのみならず、亦た煩

惱を擺去し、漸く空門に歸せんと欲す(不唯耽玩水石、以樂野性、亦擺

去煩惱、漸歸空門)」という。また「廬山草堂、夜雨獨宿、寄牛二・李

七・庾三十二員外」[107]でも「唯だ無生三昧の觀有り、榮枯は一照に

して兩つながら空と成る(唯有無生三昧觀、榮枯一照兩成空)」と述べ

ており、廬山草堂は佛道修養の場でもあった。他にも江州左遷期には、

僧侶との交流や寺院への參詣を詠じた詩が多い。

(19) 「琵琶行」を長慶年間(八二二―八二四)の作と見る近時の論考に、靜

永健「虚構の中の『琵琶行』」(『唐詩推敲』、研文出版、二〇一二年)、

下定雅弘「白居易の『琵琶行』―名作を成立させた四つの系譜―」『白

居易研究年報』(十三號、二〇一二年)がある。「琵琶行」制作の蓋然性

が最も高い年として、靜永氏は「長慶四年」を、下定氏は「長慶元年」

を比定している。

(20) 白居易が「それまでの慣用的な故郷觀を打ち破り従來の傳統になら

ない『獨自の思索』を打ち樹てたことは、澤崎久和「白居易『心泰身寧是

歸處、故郷何獨在長安』について」(『白居易詩研究』、研文出版、二〇

一三年。初出は『中國文史論叢』八、二〇一二年)を参照。なお、杜甫

の詩にも「狂歌形勝に遇ふ、醉ふを得れば即ち家と爲す(狂歌遇形勝、

得醉卽爲家」(「陪王侍御宴通泉東山野亭」『杜詩詳注』卷十一)、「此の身醒めて復た醉ふ、興に乗じて、即ち家と爲す(此身醒復醉、乘興卽爲家)」(「春歸」同卷十一)等の表現がある。何れも蜀に居た時期の作であるが、「酔うを得、興に乗じるところが家(故郷)」という考え方は、白居易の故郷觀に類似する。しかし、長安への歸郷を念願し續けた杜甫の生涯の中に、兩詩を置いて考えた場合、「卽爲家」という考えは、表層的一時的な慰めと判断せざるを得ないであろう。廬山草堂から洛陽閑居へと「心泰く身寧き處」を求め、終に「歸郷」を果たした白居易の場合とは、本質を異にするが見たい。